



日本の十大都市名 - 由来と史的背景

木村, 正史
牧山, 亮

(Citation)

神戸大学医療技術短期大学部紀要, 4:195-206

(Issue Date)

1988

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLDOI)

<https://doi.org/10.24546/80070090>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80070090>



日本の十大都市名—由来と史的背景

木村正史¹, 牧山亮²

はじめに

1987年度版の日本国勢図絵によると、わが国の十大都市は1位東京、2位横浜、3位大阪、4位名古屋、5位札幌、6位京都、7位神戸、8位福岡、9位北九州、10位川崎である¹⁾。これらの所在地を日本地図でみると、東京周辺、大阪周辺、北九州周辺と名古屋の、実に10大都市のうち9都市が本州と九州に集中していることに気がつくであろう。もう少し詳細に見ると、上記の都市が本州の太平洋沿岸地域と瀬戸内海に面した重工業地帯にあることも判明する。残りの札幌市は北海道にあって、行政・文化の中心地として第2次世界大戦後の人口の増化は著しいものがある。本州、北海道、四国、九州の主に4つの大きな島より成り立つわが国において、四国には10大都市が1つだけに含まれていない。

10大都市名を歴史的に眺めてみると、江戸時代から比較的大きな町として知られていたのは東京（江戸）、大阪、名古屋、京都ぐらいのものである。しかし19世紀中頃に120万もの人口をもっていたのは江戸（東京）だけであった。太平洋岸や瀬戸内海沿岸の諸地域に人口が集中し、都市化が見られるようになったのは明治政府の開港、富国強兵、殖産工業政策によってである。上記以外の残りの10大都市のすべてがそのよい例と言えよう。第2次世界大戦後は、また政府の高度経済成長政策にそって一段と太平洋沿岸に重工業が発達し、多くの新しい都市を生むに至っている。豊田市や水島市はその典型

的な例である。ただし、北九州という名称は1963年に5つの旧市、門司、小倉、戸畑、八幡、若松が合併して誕生しており、10大都市の中ではもっとも新しい都市名と言うことができる。

本稿の目的は10大都市名を言語的な観点から分類し、その歴史的背景を論述しつつ、それに関連した地名について若干の考察を試みようとすることである。すなわち、10大都市名を（Ⅰ）日本語由来と（Ⅱ）アイヌ語由来の2つに大きく分け、前者をさらに、（A）記述的地名（東京、横浜、大阪、名古屋、福岡、北九州、川崎）と（B）土地の機能的性格を表わした地名（京都、神戸）に細分類し、それぞれの都市名のもつ特色を浮き彫りにしようとするものである。

1 日本語由来の都市名

（A）記述的地名

1. 東京都

1868年（明治1年）7月17日の明治維新により、時の新政府は都を京都より江戸に移しそれに伴い江戸を東京と改称した。東京改称のもとになったのは1866年（慶応4年）の詔書「江戸は東国第1の大鎮、よって自今江戸を東京とせん」によっている²⁾。西の都の京都に対し、新しい東の都という意味で東京と名付けたのである。京都にかわって新しい首都となった東京は、その港のある海の入江も東京湾（Tokyo Bay）と改称している。このような方位を冠して新しい地名とすることは古くから行われている命名法で、さして珍らしいことではない。例えば東

1. 神戸大学医療技術短期大学部
School of Allied Medical Sciences, Kobe University
2. 兵庫県立星陵高等学校
Hyogo Prefectural Seiryō Senior High School
1988年7月30日受付、同年9月28日受理

村、西村、南村、北村などで、一種の方位地名と言えよう。しかし、漢字は字義のように、中国から輸入されたものであることを考えるならば、このような命名習慣は、元来は中国文化の影響によるものであると思われる。事実、中国には、東京、西京、南京、北京の東西南北をつけた都市が昔からあり、これらの名称が改称当時の為政者の頭に思い浮かんだことは十分ありうることである。

ともかく1873年（明治4年）に東京府がおかれ、1889年（明治22年）に東京市ができ、1943年（昭和18年）府と市を解消し、東京府全域をもって東京都が成立したのである。第2次世界大戦後の東京は急激な人口集中が見られ、世界有数の過密都市となり、1986年3月31日現在、8,355,000の人口をもつに至っている³⁾。

歴史的に見ると、東京がかつて江戸と呼ばれたことは、前述のとおりである。江戸は《吾妻鏡》治承4年（1180年）10月の条に、江戸太郎重長というこの地在住の豪族の名が記されているのが初見である。1337年の《円覚寺文書》にも武蔵国江戸郷が見える由である⁴⁾。しかし城下町としての江戸の起源は1457年太田道灌が江戸城を築いた時から始まる。その後1603年徳川幕府が当地に開かれ、江戸は急速に発展している。18世紀の終りには人口も100万に達し、世界最大の都市になっている。江戸時代は、名目上は京都が日本の首都であったが、実質上は江戸が日本の中心で、八百八町と言われ、繁栄が謳われたのである。明治維新により、江戸は名実ともに日本の首都となり東京の名の下に今日に至っている。なお、江戸の由来については、古来多くの説があるが定説はない。「入江の渡し場」を語源とする説⁵⁾もあれば、アイヌ語の‘etu’に由来するとする説⁶⁾もある。‘etu’はアイヌ語で「岬」又は「端」を意味し、海に突き出た陸の端あるいは平地に突き出た山端を指している。また、「入江の口」「河川の江湾などに注ぐ口」を意味し、この江戸の地名に関連して恵土、江戸、江渡、絵戸などの姓が生まれたと丹羽氏は述べている⁷⁾。歴史の浅いアメ

リカやオーストラリアの地名はかなり由来が明確であるが、それに比較して歴史の古いわが国の地名の由来は不明確である場合が多いというのが、大きな一つの特徴と思われる。

2. 横浜市

横浜市は東京湾に面する港湾都市で、神奈川県東部に位置している。1977年、人口数はついに第2位の大阪市を超えるに至っている。横浜という地名の初見は、石井光太郎氏によると室町時代のことで、時の領主平子氏が宝金剛院にあてた寄進状に見える。1442年状中に武州久良郡横浜村と明記されている由である⁸⁾。

横浜の原義については山田襄太氏は「浜に直角な砂地」「浜の横」説をとっている⁹⁾。これに対して鏡味明克氏は「横に長くのびた浜」の意と解するのが自然であると反駁されている¹⁰⁾。

「横」とは横山、横須賀、横島など多くの類例があるように「横に長くのびた感じ」を表わしたもので「縦」に対する「横」ではないと鏡味氏は主張されている。その証拠に北半島の陸奥の横浜も、越前海岸の横浜も、いずれもまっすぐな横長の海岸であると述べている。したがって、東京湾に面する神奈川県横浜も、「もと横浜にあった砂嘴の先端が横向きに浜に直角になっていた」という解釈よりも、むしろ「浜又は砂嘴全体の横長な形を記述したもの」と解する方が自然だと主張されている¹¹⁾。

歴史的にみると、1854年神奈川条約により一躍脚光を浴びるまでは、横浜は本牧台地北方の一寒農漁村にすぎなかった。1859年江戸幕府は横浜村に外国奉行を置いて運上所を設け、横浜を開港するとともに周辺の村を編入して横浜町が成立、外国人の居留も増加した。1896年に横浜港の大栈橋が完成し、西の神戸に対して生糸を中心とした東の国際貿易港として、また臨海部の埋立てにより重工業地帯として発展したのである。近年は人口増加がいちじるしく、1990年代には300万の大台を越えることが確実視されている。

3. 大阪市

1978年5月に横浜に抜かれて人口順位が全国3位になった大阪市は、その後も、いわゆる人口のドーナツ化現象により漸減しつづけているが、260万台は維持して今日に至っている。

大阪は中世末以来「おおさか」と呼ばれ、もとは「大坂」と綴った。上町台地の北端に石山本願寺を建立した蓮如上人の1498年の消息文に「東成郡生玉ノ庄内大坂トイフ在所ハ…」とあるのが大阪の初出とされている。のち、1780年ころより「坂」の字が土に反るとい^がるので忌み嫌い、「坂」と「阪」の混用期を経て1868年5月大阪府市制制定時以降、大阪となるに至っている¹²。

大阪の原義についても定説はない。一つは「大きい坂」とする説、もう一つは単なる「坂」に「お」を当てたものが「大」に転化したとする説である¹³。なお、山中襄太氏の『地名語源辞典』には、大阪は万葉集に「鳥^{オサカ}碁介」とあり、古い地図では「小坂」と記されている由。「小坂」→「大坂」に変化したのは1498年頃のことと、その頃「お」を表わす「小、雄、男、御」などは一律に「大」に変えられたと記している。類例として堺の「雄浜」が「大浜」に、和泉の「雄津」が「大津」になったことを挙げている¹⁴。

歴史的に見ると、大阪は上古、しばしば皇都となり高津宮（たかつのみや）、長柄豊碁宮、難波宮が置かれた。これらの宮殿は大阪城附近にあったと考えられている。しかし平安期から中世にかけてはさびれ、わずかに四天王寺、住吉大社の門前町として続いた。中世末期の1496年、蓮如上人が石山本願寺を建て、その寺内町として再生したが織田信長に焼かれた。1583年、豊臣秀吉が石山本願寺の跡に大阪城を築き城下町を経営したのが現在の大阪市街地のはじめである。江戸期の大阪は全国の米や物産の集散地として栄え、天下の台所と呼ばれる商都となった。明治以降は近代的商業都市として発展し、西日本の中核都市になっている。

大阪の古称は難波（なにわ）である。中世時代以前は神武天皇東征伝説に結びつけて浪速、

浪華、浪花とも書かれた。しかし難波の原義についても「大阪」同様、「魚庭^{ナニワ}」説や上記の「浪速」説などの諸説があって定説はない。今後の研究が待たれる所以である。

4. 名古屋市

名古屋は愛知県の capital で、本州の中部地方の中核地である。太平洋の伊勢湾に面し、東京の西160マイル、大阪の東90マイルの中間に位置しているので、しばしば中京（東京と西京の中間にある京の意）と呼ばれる。名古屋を中心とした地域は、また中京地区とも呼ばれている。1970年代のはじめに人口は200万を越え、わが国では第4位を占めている。

名古屋は中世時代に「那古野荘」という荘園のあったところと考えられている。古くは那古野のち名護屋とも書いたが、明治3年（1870年）名古屋と定められた¹⁵。しかしながら、池田末則氏によると、名古屋は和谷の転で「なごやかな谷をもつ土地」と解されている。つまり「平坦地」を意味するナゴヤ（和谷）の当て字である¹⁶。また吉田允義氏はナゴには「静かな入江」という意味もあり、海退や長い間の河川の沖積作用によってできたデルタ地帯にふさわしい地名と述べている¹⁷。以上のように諸説があるということは、現在のところ、まだ語源由来について定説がないと見てよいであろう。

歴史的にみると、名古屋が発展したのは1612年、那古野城跡に名古屋城が築かれ、整然と区画された城下町となってからである。職業別につけられた鉄砲町、桶屋町、呉服町、長者町とか、出身地別につけられた町名の桑名町、長島町、伊勢町など興味深い町名が多い。明治時代になってからは繊維工業がおこり、のち陶器製造、軍需工学、航空機工業も盛んになり、軽工業ばかりでなく重工業においても日本の重要な工業地帯となって今日に至っている。なお1889年10月1日に市制が施行された当時は人口157,000人であった。（cf. 1868年の明治維新の際の人口は130,000であった¹⁸。）

5. 福岡市

福岡は九州の北部に位置する福岡県の県庁の所在地である。九州の政治、経済、文化の中心地で、政令都市である。1889年4月1日、商人の町博多と城下町福岡が合併して市政を施行している。当地は原始時代から日本でもっとも早く大陸文化の影響を受けた弥生式文化の最先進地で、市の内外には遺跡が多い。536年那津宮家がおかれ、また、7世紀末には南に大宰府がおかれ、外港として遣隋使、遣唐使の発着地、貿易港として大陸文化輸入の玄関口となる。15～16世紀には対明貿易で繁栄し、天下三津の一つとして有力な博多商人を輩出した。ただし当地が福岡と名付けられたのは1601年のことで、黒田長政が博多の西に舞鶴城を建設し、城下町を黒田氏発祥の地、すなわち備前の福岡にちなんで命名したからである¹⁹⁾。備前は現在の岡山県の南部地域を指している。

ところで、1889年（明治22年）の市制発足に際し、都市名をめぐり博多派と福岡派が鋭く対立したことは余りにも有名である。那河川右岸の港商業町博多と那河川左岸の城下町福岡は合併して結局、福岡市となったが、歴史の古い博多の住民は伝統を守るとともに博多の名に愛着をもち、武士の町福岡に対して意地を張ったからである。不服の博多側は翌年1890年に市議会で市名変更の建議を出して採決にもちこんだが13対13となり、議長の職権採決で市名変更案（博多市案）は否決された。当初、博多側の賛成論者が17-13で優勢だったが、採決当日、傍聴席に玄洋社の壮士をはじめとする福岡派が群って議場を無気味に威圧したため、一票差で否決という予期せぬ結果になった由である²⁰⁾。しかし市名問題はこれで片付いたわけではなく、市制50年を過ぎた昭和初期にも改称論が出るなど、長く尾を引いたのである。従って、市名は福岡であるが、JRの博多駅をはじめ博多港、博多織、博多人形、博多節、博多どんたくなど、庶民的なものには博多を冠するものが現在も多く残っている。一方、福岡を冠するものは福岡城、福岡空港、福岡大学、福岡県、福岡国税局など、

官庁に関する名称や、歴史の新しいものが多い。このような市名との不一致は、博多派と福岡派の対立の歴史に由来しているというわけである。

言語的にみると、福岡は佳字地名と考えられる。福岡市や広島県の福山市と同様に「福」は佳字で、美称として使用されることが多い。（cf. 吉、豊、美、若などの字のついた地名、吉原、豊岡、美原、若松など）したがって、福岡は「福のとどまる岡」を、福井は「福の多い川」を、福山は「福のとどまる山」の好字をつけた地名と思われる。しかし、黒田氏発祥の備前、福岡の地名については、その語源まで言及している文献のないのが残念である。

江戸時代の福岡は筑前525万石の城下町、また商人の町として栄えたが人口では長崎、熊本が上位であった。1920年代から北九州の重化学工業や筑豊の石炭産業の伸長を背景に人口が急増し、上記の2都市を抜いて九州第一の大都市に発展している。第2次大戦後は全九州を管理する中央官庁の各出先機関や各種企業の支社、支店が集中し、全九州の管理中枢都市としてその機能を拡大している。

6. 北九州市

先述の通り、北九州市は福岡県北部の大都市である。1963年2月10日、門司、若松、戸畑、小倉、八幡の5市が世界でも例のない対等合併をして、西日本では最初の、全国では6番目の政令都市となった²¹⁾。関門海峡から洞海湾の奥にかけて東西約30kmの臨海工業地帯がつまり日本の4大工業地帯の1つと数えられている。

北九州市は文字通り「北九州に所在する都市」を意味する。合併して大都市になった場合、さまざまな命名法があるが、もっとも簡単な naming の1つは、その都市の位置する方角を既存の有名な地名につける方法である。しかし、この方法は第2次大戦後に顕著にみられる命名法で、東大阪市や東村山市や東広島市がそのよい例である。北を付した大都市はないが、郡名には北足立、北秋田のように多い。九州と

いう地名は「九つの州」「九つの国」を表わし、四国が「四つの国又は州」を表わしていることは周知のことであろう。地名用語として多用されている「州」は、元来中国で用いられていたもので、地方行政区域を称している。州のもとに郡、県があった時代（隋）もあれば、州だけがあって郡のない時代（明、清）もあった由²²⁾。江戸時代の日本では国の名の一字に、この州をつけて呼ぶことが流行し²³⁾、今もその呼び方の残っているところがある。例えば信州（信濃の国）、甲州（甲斐の国）、尾州（尾張の国）、遠州（遠江の国）などであるが、九州の場合は大きな島全体を指す地名である。なお、アメリカ合州国の state の訳語に使うカリフォルニア州、モンタナ州とわが国では言っているので留意されたい。

北九州市を構成する旧5市の由来を簡単に述べておこう。門司は関門海峡を通過する船舶に対する関所の役所の役職名から転じて役所の所在地名となっており、小倉は小倉丘に城が築かれた武家町の名が市名となっている。八幡は尾倉八幡宮の名を用いた製鉄の市で、戸畑は洞海湾口の瀬戸の端にあり、対岸の大渡駅への渡し口であった。最後の若松は、昔修多羅村の分村であったが、黒田藩が上方渡口と定め、若松（young pine tree）の佳名に改めた由である²⁴⁾。なお、北九州は合併当時人口約103万であったが、25年もたてば130万ぐらいまで増えるだろうとみられていたのに、実際は殆ど横ばいで、現在も105万台にとどまっている。もちろん、この背景には鉄鋼不況をはじめ、北九州市の経済を支えてきた素材産業の不振がある。当市はこの素材型中心の構造から脱皮すべく官民一体となって取り組んでいる。

7. 川崎市

当市は神奈川県北東端に位置し、北西を東京都、南を横浜市に接している。1987年の人口調査では第10位を占め、104万台を数える。10大都市がすべて人口100万を越している国は世界広しと言えども、アメリカ、中国、日

本ぐらいのものである。アメリカの場合は、10位の St. Louis でも200万台に達している²⁵⁾。

川崎の名が文献に「河崎荘」として見えるのは11世紀末から12世紀のはじめ頃である²⁶⁾。江戸時代に入り1623年に東海道の宿場町（post town）となり、六郷の渡しを控えて栄えた。しかし明治になると1872年鉄道開通とともに川崎駅が生れ、宿駅はさびれて一寒村となった。川崎が発展したのは日露戦争後の工業化の波にのったからであった。東京と横浜に近く、水運の便が良いことから、当地域に1907年横浜精糖（現在の明治製菓）、1909年東京電機（現在の東芝）につづき日本鋼管などの工場が進出し、第2次大戦後も石油化学コンビナートが形成されて京浜工業地帯の中心をなすに至っている。川崎市は1889年町制施行、1924年に市制施行、1927年区制（5区）を施行している。

池田末則氏によると、川崎市は「多磨川の先を開けた集落」と解されている。「崎」とは「山がなくなったところ」だとも記されている²⁷⁾。吉田允義氏も川崎は「多磨川の川口、右岸の突端部に位置しているところ」だから「川口の突端部」と解釈している²⁸⁾。ところで川崎という地名は神奈川に限らず、全国各地に見られる平凡な地名である。例えば、岩手県、宮城県、福岡県にも川崎があり、それぞれ北上川、碓石川、中元寺川の川口に元来位置していたという共通の特色がみられる。

(B) 土地の機能的性格を表す地名

8. 京都市

京都は794年、桓武天皇が当地に遷都して以来、明治維新（1868）に至るまで1070余年間の皇都であった。「平安京」と称せられたのは吉崎正松氏によると、「遷都の詔の中に、氏家が讃美して異口同音にかく唱えた」由であるが、同時に「これは天皇と政府当局の国家永遠の平和を祈願する大抱負を示すものであったろう」とも述べられている²⁹⁾。しかし一般には「京」又は「都」（みやこ）と呼ばれていた。源氏物

語や平家物語、方丈記では「京」又は「都」が使用されている。ただし、神皇正統記や太平記では「京都」が用いられている³⁰⁾。

形態論的に京都を分析すると「京」と「都」よりなる合成地名である。「京」は本来「丘」を意味する語であるが、「君主の居城のある土地」をいい、「都」は「民衆の集まり住んでいる土地」をいうが、また「天子の宮城の所在地」を指す³¹⁾。京も都も、ともに「ミヤコ」と訓する。従って、いずれの漢字も 'capital' を表わしているから 'capital' + 'capital' で、首都であることを形の上からも、意味の上からも強調した名称であると言えよう。

歴史的にみると、平安遷都以前の京都盆地には泰、出雲、賀茂、八坂、小野などの諸氏族がいた。784年に長岡京が造営されたが、造営太夫の横死などによって794年には平安京遷都の詔が発せられた。平安京は南北4.8 km、東西4.2 km の規模で、唐の長安を模してつくられた。江戸時代には政治・経済の中心が江戸（東京）に実質的には移ったが、宗教、学問、美術などの中心として常に50万人前後の人口を有していたことは特筆に値する³²⁾。

なお公的の職名について、鎌倉幕府は「京都守護」を、室町、江戸幕府は「京都所司代」をおいた。ともに公的職名に「京都」の語が用いられたが、一般には、やはり、「京」の語が用いられた由である³³⁾。明治維新で東京に遷都されたあと、京都は一時「西京」(western capital) と言ったことがあるが、後程、公式に「京都」の呼称が定められている。

9. 神戸市

当市は兵庫県南東部の六甲山系の南北に広がる市で、1868年に神戸町が設置され、1889年に兵庫県では初めて市制が施行され神戸市となっている。歴史的には西神戸が古く開け、平清盛の大輪田の泊、福原遷都（1180）や室町時代以降の兵庫津と港町機能を中心に発達してきた。1868年の兵庫開港は生田川尻の神戸村地先浦があてられ、ここを中心に近代神戸が形成された。

ただし式内社生田神社の第三裔神を祭った三宮が現在は東の近代神戸を代表する地名となっている。

落合重信氏によると、神戸市は1879年神戸部と兵庫部と、その中間の坂本村が合して神戸区となり、それが発展して1889年（明治22年）神戸市になった由³⁴⁾。ところで、神戸という地名は、一般には「生田神社の神戸（かんべ）の居住地であったことにより生れた地名」と云われている³⁵⁾。神戸（かんべ）とは「国へ納める祖、庸、調を神社へ納める集落」のことである。しかし落合氏によると、神戸とは「箇々の神社に属するものでなくて、摂津国なら摂津国でいくつかの神戸となる郷を定めており、それを国で各神社に配分した」と述べておられる³⁶⁾。神戸には生田神社のように44戸を与えられているものもあれば、神社によって1戸、2戸というものもある。従って、いくら隣りに接しているからといって、制度上では直接、生田神社に所属していたものではない由である。しかし「生田神社は44戸を受ける名神大社であり、一郷は50戸を制とするものであったから、生田神社に接していた神戸が一々収穫を国庁に運んで、それをまた生田神社へ運ぶという労を省いて、直接生田神社へ納める形になったであろうことは十分考えられる。」と落合氏は主張されている³⁷⁾。つまるところ、制度上は神戸は「生田神社の神戸」由来とは云えないが、実質上は「生田神社所属の集落」であったと云うことに要約できよう。

ところで「神戸」の発音変化の過程は興味深いものがある。一般には *Kamibe*→*Kambe*→*Kobe* と変化したと考えられている³⁸⁾。しかし、いつごろから *Kambe* となり、いつごろから *Kobe* となったかは明らかでない。今後の研究が待たれる所以である。なお神戸市の電話帳（1987）で神戸（かんべ）姓と神戸（こうべ）姓を調べてみると、前者の保持者は54人に対し、後者のそれは2人だけである。ただし、関東地方には神戸と書いて「ごうど」「じんこ」と呼ぶ姓もあるので注意を要するであろう。

II アイヌ語由来の都市名

10. 札幌市

札幌は北海道の行政、文化、経済の中心都市である。1869年に開拓使がおかれ、1886年に北海道庁がおかれて北海道の中心地としての地位が定まった。開拓使がおかれた当時、中心部の和人は2戸7人で、周辺部の元村（現元町）、発寒（はっさむ）などで10数人を数えるのみであった³⁹⁾。1922年に市制が施行され、1940年には函館市を抜いて北海道内最大の都市と成長し、1972年には政令指定都市となっている。第2次大戦後、産業活動の活発化、隣接町村の合併などで人口増加がいじりしく、1985年10月1日現在では1,543,000人余で、第5位の大都市に発展している。

札幌はアイヌ語の原音を漢字であてた地名である。すなわち、sat-poro-pet を音訳した地名である。山田秀三氏によれば、大地名の例に洩れず、札幌のアイヌ時代の原義は忘れ去られ、明治以降、数多くの説が出されている由である。例えば、アイヌ語の sat-chep-poro（乾いた・魚・多い）からサッポロになったという説（林頭三）、「乾燥広大」の意で、「大陸」と訳す説（永田方正）、「サリ・ポロ・ベツ（その葦原が・広大な・川）」が「サチ・ポロ・ベツ」と訛り、また下部が略されて「サチ・ポロ」となり、更に「サツ（乾いている）」に付会されて「サッポロ」になったという説（昭和29年の新説）などである⁴⁰⁾。これに対して山田氏は、もう分らなくなった名であるが、地名一般の付け方からみて、平易に「サツ・ポロ・ベツ（sat-poro-pet）」つまり「乾く・大きい・川」ぐらいに解するのが自然なような気がする」と述べられている。上の説は松浦武四郎説で、札幌川（＝豊平川）が峡谷を出て札幌扇状地（今の市街地）で急に広がり乱流し、乾期に乾いた砂利河原ができる姿を呼んだものではないかと松浦説を支持されている⁴¹⁾。

現在、札幌はローマ字で表記すると‘Sapporo’と書くが、アイヌ時代の音は‘satporo’で、

「さとほろ」とも呼ばれていた由。古い元録郷帳（1700年）では「しゃほろ」である。アイヌ語ではサ行音とシャ行音は同音であった⁴²⁾。札幌は元来、川の名で豊平川の古名である。ただし、それがサッポロ川で呼ばれた時代は、現在の豊平橋の辺からもっと北向きに流れていたらしい。アイヌ時代の慣わしで、その川筋一帯の土地もサッポロであったと、アイヌ語地名研究の第一人者の山田氏は述べておられる⁴³⁾。

北海道の地名の特徴は、何と言っても、アイヌ語由来の地名の多いことである。しかし、同じアイヌ語由来の地名でもアイヌ語地名を音訳したものと、意識したものとの2つに大別される。前者には札幌や稚内（ヤム・ワッカ・ナイ）〔冷い・水・川・の意だが、ヤムが省略されている〕が、後者には旭川（チェブ・ベツ）〔月日の出る川の意〕や砂川（オタ・ウシ・ナイ）〔砂の多い川〕が見られる。また圧倒的に多いアイヌ語地名にまじって、開拓者名をふした仁木町（仁木竹吉氏にちなむ）や沼田町（沼田嘉太郎氏にちなむ）、本土の出身地名をふした広島町、新十津川町などの和名地名も散見されて興味深い。

む す び

都道府県名や都市名などの大地名から大字、小字などの小地名までを含めると、わが国の地名の総数は約1,000万と推定されている⁴⁴⁾。これほど地名の数が面積に比して多いということは、わが国の地名の大きな特色で、歴史が長く、大昔から祖先の生活活動が活発で、地名も日常生活の中で大きな役割を演じてきた証拠でもあろう。ところで、1987年の日本国勢図絵によると、1,000万の地名のうち市は652であり、町村は2,604を数えるにすぎない⁴⁵⁾。本稿で取り上げた都市名は、そのうちの、ほんの10箇だけであるが、それでもわが国の地名の特徴の一端を如実に示していると考えられる。

先ず歴史の古さにもよるが、原義の全く忘れ去られている都市名の多いことである。殊に明

治以前につけられた旧名には定説のないものが多い。江戸、大阪、難波、名古屋、札幌、横浜などは大地名であるにもかかわらず、定説のないのが現状である。しかし定説がないのは、それだけ多くの諸説が生れてくる原因にもなっており、今後の研究が一層待たれる所以でもある。

言語的にみると、10大都市名のうちアイヌ語由来の札幌を除き、残りは大和語（日本語）に由来している。しかし、ただ一箇とは云え、アイヌ地名の存在は北海道のみならず、東北地方を含む東日本にかなりアイヌ語由来の地名が存在することを予想させるものである。わが国の地名には、鏡味完二氏によると、民族型として①アイヌ語のほかに、②朝鮮語（ex. 呉・久礼は句驪の訛語）③大和語、④マライ語（ex. 多良・多羅はマライ語の「小平地」）の存在を指摘されている⁴⁶⁾。言語的多様性をもっていることが日本の地名の一つの特色であることを示唆していると云えよう。

10大都市名のうち、descriptive names が大部分であることも示唆的である。すなわち、土地の地勢や、川、岡、又は方位をふした地名が圧倒的に多いのである。その中にあって、大阪や福岡のように佳称地名、好字地名が含まれていることは、嘉名化、佳字化、二文字化などの人為的変転を繰り返してきた地名がわが国に多いことを物語るものであろう。

都市名も時代により特色が見られる。北九州都市などは平凡な地名だが、これに類する地名は殊に最近多くなっている。第二次大戦後につけられた地名の特色と云えよう。又「いわき市」や「つくば市」のような、いわゆる「かな地名化」も戦後の命名法の特色となっている。

最後に10大都市の順位について一言。都市の盛衰は世の常である。10大都市と言っても、時代によって順位も変る。過去10年間における順位の入れかえは、東京周辺及び北海道の札幌地域への人口集中化が顕著なためであるが、その原因となっているのは多極化よりは、むしろ東京周辺への経済、行政、文化の集中化がもたらしたのではないだろうか。

参考までに、附録として、人口30万以上の市の人口と面積、及び過去65年間の10大都市の人口推移の統計表を挙げておこう。

文 献

1. 矢野一郎：日本国勢図説，国勢社，1987，p.73
2. 池田末則：日本地名基礎辞典，日本文芸社，1980，p.131
3. 矢野一郎：同上，p.73
4. 下中邦彦：世界大百科事典，平凡社，1980。「江戸」参照
5. 吉田允義：地名のルーツ，オーエス出版，1979，p.14
6. 山中襄太：地名語源辞典，校倉書房，1978，p.72
7. 丹羽基二：姓氏の語源，角川書店，1981，p.193
8. 石井光太郎：地名の横浜，月報角川地名大辞典，p.1
9. 山中襄太：同上，p.359
10. 鏡味明克：神奈川の地名，月報角川地名大辞典，p.184
11. 鏡味明克：同上，p.185
12. 山口恵一郎：日本地名辞典（市町村編），東京堂，1980，pp.98-9
13. 丹羽基二：同上，p.194
14. 山中襄太：同上，p.76
15. 山中襄太：同上，p.259
16. 池田末則：同上，p.164
17. 吉田允義：同上，p.67
18. Goetz P: Encyclopedia Britanica, London, 1982, s.v. "Nagoya."
19. 吉田允義：同上，p.27
20. 上山英昭：話題源地理，東京法令出版社，1988，p.249
21. 山口恵一郎：同上，p.190
22. 山中襄太：同上，p.187
23. 山中襄太：同上，p.187
24. 池田末則：同上，pp.226-7
25. Webster M: Webster's New Geographical Dictionary (G. & C. Merriam Company, Publishers, Springfield, Massachusetts,

- 1972), s.v. "St. Louis."
- 26 . 山口恵一郎：同上， p.173
 - 27 . 池田末則：同上， p.138
 - 28 . 吉田允義：同上， p.61
 - 29 . 吉田正松：都道府県名と国名の起源，古今書院，
1985， p. 42
 - 30 . 吉田正松：同上， p.42
 - 31 . 吉田正松：同上， p.42
 - 32 . 山口恵一郎：同上， p.198
 - 33 . 吉田正松：同上， p.48
 - 34 . 落合重信：兵庫県の地名・神戸市の地名，神戸
新報社，1981， p.96
 - 35 . 吉田允義：同上， p.73
 - 36 . 落合重信：同上， p.96
 - 37 . 落合重信：同上， p.96
 - 38 . Seton C: Hills & Water, Kobe Sketch-
book, 弓書房，1978， p.29
 - 39 . 山口恵一郎：同上， p.257
 - 40 . 山田秀三：北海道の地名，北海道新聞社，1984，
p.17
 - 41 . 山田秀三：同上， p.17
 - 42 . 山田秀三：同上， p.17
 - 43 . 山田秀三：同上， p.17
 - 44 . 丹羽基二：日本の姓氏と地名，新人物往来社，
1986，（1月号）， p. 38
 - 45 . 矢野一郎：日本国勢図絵，国勢社，1987， p.72
 - 46 . 鏡味完二・鏡味明克：地名の語源，角川書店，
1977， pp.13－23

附録 1

人口30万以上の市（1985年10月1日現在）＊

	面 積 (km ²)	人 口 (千人)	人口密度 (1km ² に つき人)		面 積 (km ²)	人 口 (千人)	人口密度 (1km ² に つき人)
東京… ¹⁾	598	8,355	13,973	八王子…	188	427	2,272
横浜……	431	2,993	6,948	西宮……	99	421	4,276
大阪……	213	2,636	12,372	倉敷……	299	414	1,383
名古屋…	328	2,116	6,454	豊中……	37	413	11,290
札幌……	1,118	1,543	1,380	岐阜……	196	412	2,099
京都……	611	1,479	2,423	宇都宮…	312	405	1,297
神戸……	544	1,411	2,593	川口……	56	403	7,241
福岡……	337	1,160	3,445	和歌山…	206	401	1,945
川崎……	136	1,089	7,977	市川……	56	398	7,055
北九州…	481	1,056	2,198	大分……	359	390	1,087
広島… ²⁾	737	1,044	1,417	枚方……	65	382	5,925
堺………	134	818	6,100	浦和……	71	377	5,311
千葉……	270	789	2,919	大宮……	89	373	4,196
仙台……	237	700	2,954	旭川……	749	364	485
岡山……	511	572	1,121	福山……	364	360	989
熊本……	172	556	3,236	いわき…	1,230	351	285
鹿児島…	289	531	1,835	吹田……	37	349	9,534
東大阪…	62	523	8,471	高槻……	105	349	3,323
浜松……	250	514	2,053	長野……	404	337	834
尼崎……	49	509	10,291	藤沢……	70	328	4,716
船橋……	85	507	5,957	奈良……	212	328	1,546
相模原…	91	483	5,319	高松……	195	327	1,677
新潟……	209	476	2,278	豊橋……	259	322	1,244
静岡……	1,146	468	409	町田……	72	321	4,490
姫路……	272	453	1,667	函館……	348	319	918
長崎……	242	449	1,859	富山……	209	314	1,502
金沢……	469	430	920	高知……	143	312	2,180
松戸……	61	427	6,985	豊田……	290	308	1,064
横須賀…	99	427	4,294	那覇……	38	304	7,996
松山……	289	427	1,474	郡山……	729	302	414

総務庁統計局「1985年国勢調査・全国都道府県市区町村別人口および世帯数
(確定数)」による。1) 23区。2) 1985年3月20日に五日市町を編入合併。

＊矢野一郎監修『日本国勢図絵』（日本国勢社、1987年度版）による。

附録 2

大都市の人口の変遷 (単位 千人) **

	1920 (大 9)	1935 (昭10)	1950 (昭25)	1960 (昭35)	1970 (昭45)	1980 (昭55)	1985 (昭60)
東京..... ¹⁾	2,173	5,876	5,385	8,310	8,841	8,352	8,354
横浜.....	423	704	951	1,376	2,238	2,774	2,993
大阪.....	1,768	2,990	1,956	3,012	2,980	2,648	2,636
名古屋.....	608	1,083	1,031	1,592	2,036	2,083	2,116
札幌.....	—	197	314	524	1,010	1,402	1,543
京都.....	591	1,081	1,102	1,285	1,419	1,473	1,479
神戸.....	609	912	765	1,114	1,289	1,367	1,411
福岡.....	123	291	393	647	853	1,089	1,160
川崎.....	—	155	319	633	973	1,041	1,089
北九州..... ²⁾	—	—	—	—	1,042	1,065	1,056
広島..... ³⁾	161	310	286	431	542	899	1,044
堺.....	90	141	214	340	594	810	818
千葉.....	—	57	134	242	482	746	789
仙台.....	119	220	342	425	545	665	700
岡山.....	111	166	163	261	375	546	572
熊本.....	130	187	268	374	440	526	556
鹿児島.....	103	182	229	296	403	505	530
東大阪..... ⁴⁾	—	—	—	—	500	522	523
浜松.....	72	133	152	333	432	491	514
尼崎.....	38	71	279	406	554	524	509
船橋.....	—	—	83	135	325	479	507
相模原.....	—	—	—	102	278	439	483
新潟.....	92	135	221	315	384	458	476
静岡.....	74	201	239	329	416	458	468
姫路.....	52	91	212	329	408	446	453
長崎.....	177	212	242	344	421	447	449
金沢.....	137	164	252	299	351	418	430
松戸.....	—	—	53	86	254	401	427
横須賀.....	90	183	251	287	348	421	427
八王子.....	39	59	81	158	254	387	427
松山.....	52	82	164	239	323	402	427
西宮.....	—	90	127	263	377	410	421
倉敷..... ⁵⁾	—	35	53	125	340	404	414
豊中.....	—	—	86	199	368	403	413
岐阜.....	63	129	212	304	386	410	412
宇都宮.....	64	87	107	239	301	378	405
川口.....	—	54	125	170	306	379	403
和歌山.....	85	180	191	285	365	401	401
市川.....	—	47	103	157	261	364	398
大分..... ⁶⁾	43	62	94	125	261	360	390
枚方.....	—	—	44	80	217	353	382
浦和.....	—	44	115	169	269	358	377
大宮.....	—	—	100	170	269	354	373
旭川.....	—	91	123	188	288	353	364
福山..... ⁷⁾	30	58	67	141	255	346	360
いわき..... ⁸⁾	—	—	—	—	327	342	351

各年10月1日現在の国勢調査人口。1) 1920・35年は東京市で、1947年に現在の23区になる。
 2) 1963年に門司、小倉、若松、八幡、戸畑の5市が合体。3) 1985年に五日市町合併。4)
 1967年に布施、枚岡、河内の3市が合体。5) 1967年に玉島、児島市と合体。6) 1963年に鶴
 崎市他と合体。7) 1966年には松永市と合体。8) 1966年に平、磐城、常磐、内郷、勿来の5
 市が合体。

** 矢野一郎監修『数字で見る日本の100年』(日本国勢社、第2版、1986)による。

Names of the Ten Biggest Cities in Japan— Their Origins and Historical Backgrounds

Masashi Kimura¹ and Tōru Makiyama²

ABSTRACT: Although the ranking of cities and towns has been statistically recorded for the past 65 years in terms of population, it is interesting to note that it was only in 1975 that all the ten biggest cities came to have over one million. Since then their rankings have changed dramatically, but the names of their cities themselves remain unchanged.

This paper deals with the names of the ten biggest cities with special reference to their origins and historical backgrounds, classifying them into two language categories, i.e., Japanese and Ainu. The names of nine cities out of ten are derived from Japanese and only 'Sapporo' comes from Ainu. As the sub-division according to the features of these places, they can be further classified into two groups; descriptive place-names and those representing functional characters of the places. Tokyo, Yokohama, Osaka, Nagoya, Fukuoka, Kita-Kyushu, Kawasaki, and Sapporo belong to the former, while Kyoto and Kobe to the latter.

Regarding the primary meanings of these names, however, there seem to be no authoritative theories except regarding those of Tokyo and Kita-Kyushu. These two names are comparatively new from a historical viewpoint and their original meanings are quite clear. The obscurity of primary meanings of the remaining eight names suggests that there are a host of important place-names in Japan which call for scholars' scientific attention in the future.

Key Words: Ten biggest cities,
Japanese place-names,
Origins,
Historical backgrounds.

1. School of Allied Medical Sciences, Kobe University
2. Hyogo Prefectural Seiryō Senior High School